校歌の作詞・作曲者について

作詞者 中西健蔵 先生（1912～1942）

遠賀郡芦屋町の出身で、旧制東筑中学を卒業後、昭和 8 年から 14 年 3 月まで本校に勤められました。カメラも趣味だったようです。いつも黒い詰め襟の服を着て、本を片手にする文学青年でした。

童謡・童話雑誌「赤い鳥」の購読者であったらしく、白秋と耕筰の童謡などを子どもたちに教えられていました。同人誌「多磨」（9 巻 3 号）にもお名前が見えます。

「多磨」の筑後支部や大川支部の事務局のような役割をされていたようです。柳川へ来られたのも白秋の作品が好きだったからではないでしょうか。

その後、芦屋尋常高等小学校に転勤され、昭和 16 年に出征、17 年 2 月 9 日未明にマレーシアのジョホール水道（シンガポール対岸）渡河作戦中に戦死されました。30 才でした。

作曲者 津久井 昇 先生（1911～1947）

群馬県藤岡市で出生、東京音楽学校（現東京芸術大学）作曲科卒業の音楽家です。

卒業後、千葉県市川市を拠点として児童、生徒への音楽普及を目的とする「いづみ会」を主宰し、あわせて作曲活動もされました。作品の大部分は日常接することの多い児童、生徒を対象とした童謡でした。

「少し体が弱かったこともあり、職業病でもある腱鞘炎（けんしょうえん）に悩まされることが多かった」と、長男の宏さんはふりかえります。

戦後の昭和 22 年 9 月 12 日、疎開先であった茨城県土浦市で病気のためになくなられました。36 歳の若さでした。

■ 主な作曲作品

「母さんのお名前」・「葡萄のつる（白秋詩）」・「笛」・「陽炎（かげろう）」・「狐の舌」・

「月光曲」・「日向ぼっこ」・「お月夜」・混声合唱曲「櫻田（高市黒人詩）」・

混声合唱曲「ぬばたまの（山部赤人詩）」

※　昭和 29 年発行の「幼児歌曲集」には、「こぶとり」「すべりだい」（いずれも内山憲尚氏作詞）の 2 作品が載っています。

中西 健蔵物語　「水沼童と幾年」

水沼童と幾年に（みぬまわらべといくとせに）

～「濱武尋常高等小学校歌」作詞者 中西健蔵 物語～

プロローグ

かつて高校で教鞭をとった待鳥桂司（76 才）は、自分の運命的な出会いが小学校一年生のときであったことを思い出す。

その人物は、バス通りの O 邸の二階に下宿していた。いつも黒い詰め襟の服を着て、眼鏡の奥に優しさをたたえ、本を小脇に抱え、小さなカメラを携えていた。

文学青年にしてはがっちりした体躯をオルガンの前に置くと、巧みに童謡を弾いた。

昔のオルガンは力を入れて弾かないとならなかったのか、力強いタッチと太い歌声がまだ耳の中に残っている。

青年教師の名前は、中西健蔵といった。

1　健蔵、濱武に来る

健蔵は、遠賀郡芦屋町の出身で、旧制の東筑中学（現東筑高校）を卒業したあと、三潴（当時）の干拓地に現れた。

彼は、白秋の童謡や詩が好きだった。白秋のふるさとで、心の弟子になりたかったのかもしれない。

健蔵は、白秋とのつながりを求めて柳川（三潴）に来た形跡がある。

童謡雑誌「赤い鳥」の昭和 9 年 6 月号の中に定期購読者として中西健蔵の名前を見ることができる。

健蔵は、「赤い鳥」を通して、「世間の小さな人たちのために、芸術として真価ある純麗な童謡や童話」（鈴木三重吉）を子どもたちに伝えたかったのだろう。

健蔵は、昭和 8 年 5 月に濱武尋常高等小学校に来た。代用教員でのスタートだった。

濱武村は、白秋生家とは、沖端川をはさんで対岸にある漁・農村である。

生家から下宿先までは直線で 1 キロもない。 健蔵の記録は学校にほとんど残っていない。

健蔵の記憶は、教え子達の中に広く深く残っている。

2　教え子たちの記憶

6 年生の時、朝鮮から引き揚げてきた井上英子（85 才）も教え子の一人である。

「口角泡を飛ばす」ほどに熱心に指導する健蔵の姿が忘れられない。

言葉の違いに戸惑い、無口になりがちな英子に対して、熱血青年教師の健蔵が優しく言葉をかけてくれた。

そして、子ども心にこの先生が作詞したという格調高い校歌に誇りを持った。

井上の同級生、大津留文子（86 才）は、きまじめで朝早く教室へ来てオルガンの練習をする健蔵の姿を目撃している。

「熱心で、元気な先生でしたよ。堅実な方でね。」と、あの頃に習った『ゆりかごの歌』を今でも口ずさむ。

井上の妹である諸橋恵美子（78 才）も教え子の一人だ。

白秋の童謡や山田耕筰の作品「待ちぼうけ」などの曲を友だちと大きな声で歌った経験を語る。独特の教え方を見て、「きっと偉い先生だったんだ。」と今でも懐かしむ。

待鳥太刀男（82 才）は、学校で校歌を歌うときは、いつも健蔵の指揮で歌ったことを昨日のことのように覚えている。

●昭和 9 年卒業写真女子組

3　健蔵、校歌を書く

当時、濱武尋常高等小学校では、「郷土研究」が盛んで、濱武村の自然・沿革・生業・交通・衣食住・各種諸機関について分担活写されている。

二ヶ年の歳月を経て昭和 10 年には、「郷土史 はまだけ」を刊行するほどだった。

健蔵は、当時の上野季雄校長からの指示で、郷土研究の成果を踏まえつつ、校歌を作詞することになったらしい。後年のことになるが、健蔵は、白秋主宰の短歌同人誌「多磨」の会員になり、自作の短歌を応募するなど、白秋作品への傾倒と創作意欲を持っていた。上野校長が校歌作詞の指示を出したのも、このあたりのことと符合する。

校歌をみると、健蔵の詩は、堅実派らしく終始七・五調が全面にわたって貫かれている。

戦争の気配が漂い始めた昭和初期ではあるが、健蔵の作詩は当時の空気に抗うように、愛郷の精神に満ちあふれたものだった。

ところで、校歌や団体歌の作詞を数百件手がけた白秋は、『歌謡非常時論』（昭和 10 年 1 月）の中で校歌について、次のように書いている。

「校歌なるものは、一校の精神を顕揚し、志気を一つに聚め、弥が上にも好学と団結の力を昂騰せしむべきものである。而も之に鼓舞し作与するのは詩人の責務である。」（白秋全集 36・P77～78）

健蔵が作った校歌の詞には、こうした力みは見られない。「赤い鳥」の影響を受け、子どもたちに郷土の良さを培いたいという願いが込められているにすぎない。

しかし、芦屋千軒、芦屋釜を生み、玄界灘を臨む巌（いわ）と白砂青松の海から、有明海の干潟の村にやってきた健蔵にとって、見るもの総てがちがっていたはずである。寒かった冬が去り、南風はあたたかい風が海から吹き始める春の訪れを表す。

魚の群れが北上し、漁村は活気づき、農家は田での仕事に精を出す。

橘は、カラタチバナともいい、カラタチのことか。秋に芳香のある実をつける。白秋と耕筰のコンビによる「からたちの花」が有名。

強いて言えば、三番の歌詞に勇ましさが出ている。

挙（こぞ）る＝(1)一致した行動をすること、一斉にする、(2)ことごとく集まる。（広辞苑）

人と人、国と国が争うことより、自然との闘いで郷土を拓いた先人達への憧憬にあふれている。

このことが、濱武尋常高等小学校、さらに昭代第二尋常高等小学校、昭代第二国民学校、そして現在の昭代第二小学校と校名が替わっても、この校歌をずっと生きながらえさせることになった。

この校歌も、一度危機に陥ったことがあった。

ある紀年行事の際に、子どもの言葉にあった歌詞にしようとする発議がなされたという。当時の職員の中には、まだ健蔵と机を並べた者もいて、その案はお蔵入りとなった。

こうして、この校歌は、戦争の時代を超えて 70 年以上も歌い継がれることになる。

昭和 9 年当時の小学校で校歌を持つことは稀であり、卒業生はもちろん、校区民の自慢であり誇りとなった。

祖父母が歌い、父母が歌いついだ校歌を、今孫たちも歌っている。

4　健蔵と短歌（うた）

昭和 11 年 5 月には、筑後支部歌会の記事の中に健蔵の名前を見つけることができる。昭和 13 年以降、この近くの歌人達が集まる歌会の会場は、濱武尋常高等小学校だった。（多磨支部一覧に「大川支部」として三潴郡濱武村濱武＝中西健蔵方とある）

同人誌「多磨」の大川支部など動向の欄に、幾度となく健蔵の名前と作品を見いだすことができる。

当時一年生であった待鳥桂司が、今でも諳（そら）んじている短歌（うた）がある。 異動の決まった健蔵がお別れとしてみんなに披露したものである。

不知火の　水沼童（みぬまわらべ）の　国なまり　聴きつつ悲し　七とせの春

※水沼とは古代の郡名。三潴地方の古い呼び名である。

●昭和 12 年度卒業写真

●昭和 13 年度職員写真

昭和 14 年の 4 月、健蔵は、7 年間親しんだ濱武尋常高等小学校に別れを告げ、郷里の遠賀郡蘆屋尋常高等小学校に転出する。（芦屋小「職員録」）

戦時体制が近づくと、壮年男性は、出身地近くの職場に呼び戻されたという。

「多磨」昭和 14 年 5 月号の会員転居一束にもその記述がある。

健蔵は、自分自身の異動や消息についても多磨同人誌に連絡をとっていたらしい。

「多磨」の中に、白秋の言葉で、次のような一節がある。（9 巻 3 号）

「最近に『多磨』から応召した人に一部の〇〇と二部の〇〇、三部からも又中西健三（ママ）、福沢めぐみの諸君が出た。」（昭和 14 年 9 月 1 日）

応召とは、軍人が召集に応じて指定の地に参集することである。

昭和 15 年 1 月 1 日の「多磨」の歌會通信の欄には、北九州支部 12 月歌會として、「12 月 10 日（中略）応召入営中の中西健蔵氏（中略）を迎え、小人数ながらも終始和やかな空気の裡に、真摯な批評溌剌たる歌論が交換せられた。」（第 10 巻第 1 号）とある。 応召の中でも健蔵は短歌を捨てなかった。いや、命を全うすることの難しい将来を見据え、捨てきれなかったのかもしれない。

5　健蔵からの手紙

待鳥桂司は、昭和 15 年に南支（主に広州などの中国南部）から健蔵の次のような詩を軍事郵便で受け取ったと話す。

水沼童との交流は続いていた。

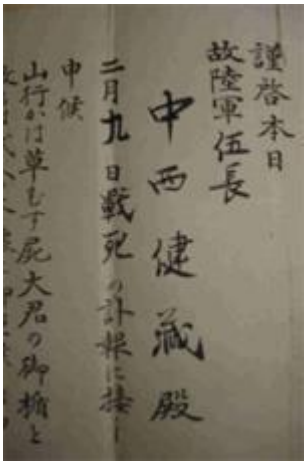
夕焼け ゆうやけ 灯がついた

すすきの 枯穂（からほ）に 灯がついた

かささぎ、 鵲（かささぎ） はよもどれ

雲仙 おやまも もう暮れた

南風薫る三瀦野から、雲仙を仰ぎ見た思い出だろうか、童謡風の詩にある「はよもどれ」という言葉が健蔵の置かれた身の上に照らせばあまりにも悲しい。



●健蔵から届いた軍事郵便（待鳥桂司氏所蔵）

6　濱武

健蔵の甥にあたる中西功之（69 才）は、健蔵が遠賀川駅から出征するとき旗の行列と万歳の波の中で母におぶられて一緒に歩いた記憶がある。

功之は、残された健蔵の写真とオリジナルの楽譜を額に入れて大切に守ってきた。

平成 15 年、思い立って楽譜にある三潴郡濱武小を探した。

久留米から柳川に通じる県道を南下するうちに、三潴という町名を見つけるが、「濱武」を冠する地名や校名には出会わない。潮の香りのする有明海を臨む漁港まで来て、やっとのことで浜武漁協を見つけ、昭代第二小学校が健蔵の勤めた学校であることを突き止めた。

高ぶる気持ちを抑えるために、有明海の見える堤防に立ち、潮風に吹かれた。

頑強なコンクリートが波を防ぎ、眼下には美田が広がっていた。この土地の人々の底力を見たように思えた。ここで、健蔵も有明海の向こうにそびえる雲仙を見たのだろう。

期待と不安を相半ばに学校を訪問し、健蔵が作った校歌がまだ歌い続けられてことを知り感動した。

健蔵が作った校歌を歌う子どもたちの表情と歌声を聴いて、涙があふれてきた。

7　ジョホール・バル

健蔵は、南支からシンガポール攻撃作戦に向かったらしい。

そして、昭和 17 年 2 月 9 日未明、シンガポールを臨み、マレー半島の最南端にあるジョホール水道（海峡）を渡る作戦中銃弾に倒れた。（享年三十）

功之の手元には、戦死公報と戦後しばらくして届いた故陸軍伍長中西健蔵の最後を伝える上官からの手紙があるだけである。

白秋は、昭和 17 年 6 月の「多磨」の中で、与謝野夫妻から継承した短歌同人誌に駈ける自らの決意を次のように語っている。

「近況について、怒濤のごとく仕事は進撃する。マレー攻略のごとくである。」（十四巻六号）

そのマレー攻略戦でシンガポールを目前に健蔵が倒れたことを白秋は知るよしもなかった。

（昭和 17 年 11 月 2 日、白秋逝去、享年五十七）

エピローグ

教え子達に取材する中で、情報の滞りがちだった当時にあって、芦屋に異動した健蔵が戦死したことをかなりの人たちが知っていることもなぞの一つだった。待鳥桂司にそのことを聞く

と、「確か、校門の前に中西先生の戦死の報が掲示されたんですよ。」と語った。子どもたちや保護者からも親しまれた健蔵の思い出に濱武村が沈んだ日だったにちがいない。

中西功之が芦屋で大事に守っていた楽譜は、平成 19 年の夏休みに昭代第二小学校に貸し出されることになった。昭二小にある楽譜は昭和 28 年の水害によるものか、水を被ったように黒く変色してシミが目立ち読み取りにくくなっていたからである。

オリジナル版からの写真製版により再生した楽譜は、当時の子どもたちと校区民の誇りを今に伝えている。

〔文中敬称略・年齢は取材当時〕

［文責 姉川圭介］

【追記】

この時点で、作詞者中西健蔵と作曲者津久井昇との邂逅は、未だ解明されないままである。
津久井昇について語る機会に譲ることにする。
中西功之氏は、平成 21 年 7 月ご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りします。

【参考文献】

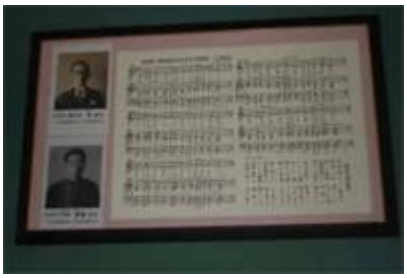
(1)柳川市立昭代第二小学校「八十八周年特別号」(昭和 48 年)

(2)同上　　「開校百周年記念・昭二校誌」(昭和 62 年)

(3)三潴郡濱武尋常高等小学校 郷土史 「はまだけ」(昭和 10 年)

(4)柳川山門三池教育會編「柳川山門三池小中高・校歌集」(昭和 60 年)

(5)読売新聞文化部 「唱歌・童謡物語」(平成 11 年)

(6)北原白秋「白秋全集 36・37」岩波書店 (昭和 62 年)

※　短歌同人誌「多磨」(白秋記念館蔵) 及び「赤い鳥」復刻版＝日本近代文学館 (佐賀県立図書館蔵) に多くを引用させていただいた。

【取材協力者】

- 冷牟田那智 様（遠賀郡芦屋町立芦屋小学校長）
- 野口清香 様（旧濱武尋常高等小学校職員）
- 古賀茂（雁来紅）様（旧濱武尋常高等小学校職員）
- 平田龍司 様（東筑高校同窓会事務局長）
- 津留秀春 様（北原白秋生家・記念館事務局長）

●70 年後初めてのお墓参り 元同僚と教え子達（平成 19 年 11 月 10 日）

津久井 昇物語　「童心を歌に寄せ」

童心を歌に寄せ

～「濱武(はまたけ)尋常高等小学校歌」作曲者 津久井 昇（つくいのぼる） 物語～

プロローグ

昭代第二小学校の音楽主任・武下順子は、校歌の良さを二つあげる。

(1)1 年生から 6 年生までが無理なく歌える音域であり、

(2)リズムがとりやすく、正確にタクトをふることができる、

という。この校歌を作曲したのは、どんな人物なのか、儀式や全校朝会の時に 200 名の子どもたちの声を聴きながら校歌を伴奏するとき、いつもそんな思いにかられていた。

「この度、有明の海を臨む学校に奉職しました。干拓魂を持つ地域の人々も親しみ深く、子どもたちは、伸び伸びとして素朴です。白秋先生の生家からあまり遠くないのが気に入っています。ところで、校歌を書くように言われました。つきましては、貴君に作曲を頼もうと筆をとった次第です。」

津久井昇は、旧知の中西健蔵から手紙を受け取った。

昭和八年の夏休みが終わるころだった。

健蔵の手紙には、6 年生の担任となり、卒業式に歌えるように間に合わせたいと書いてあった。

練習時間を計算に入れると来年 1 月までにはなんとしても仕上げる必要があった。

昇は、頭の中でスケジュールを描いていた。

●紅葉の中庭で、(at Nakanishi Stage)昭代第二小

1　東京音楽学校

当時の津久井昇は、1931 年（昭和 6 年）の規則改正により昭和 7 年に開設された東京音楽学校の作曲部入学をめざしていた。

それまでの音楽学校本科には、器楽部と声楽部しかなかったのだが、「ドイツ楽壇に名を有する」クラウス・プリングスハイムが 6 年 9 月に就任したのが作曲部の創設だった。（瀧井敬子「タイムカプセルに乗った芸大」・東京芸術大学ホームページ）

そのころの東京音楽学校は、ヨーロッパ一流の音楽大学とも遜色ない外国人教師を擁していた。

ピアノのレオ・シロタ、バイオリンのロベルト・ポラック、バリトン（声楽）のヘルマン・ヴーハーペニヒ、ソプラノのマリア・トルなどである。

ヒットラーのユダヤ人政策により、ヨーロッパを後にした人たちも含まれていた。

日本人の教師も充実していた。 童謡の作詞家・国文学者である高野辰之、作曲の岡野貞一のコンビは、「朧（おぼろ）月夜」「春の小川」「ふるさと」などを生み出していた。

また、「海ゆかば」（昭和 12 年）や白秋の詩「海道東征」（同 15 年）「帰去来」（同 16 年）を作曲した信時潔も作曲科の教師の一人だった。

すでに昇は、昭和 7 年 3 月に東京音楽学校に併設された第四臨時教員養成を修了していた。

この養成所は、師範学校、中学校及び高等女学校の教員を養成する臨時の機関であった。師範科の生徒と一緒に勉強することから、音楽教員としては当時最高の教育機会に恵まれていた。

音楽史の乙骨三郎も指導教官の一人だった。（津久井昇「恩師乙骨三郎先生を偲びて」東京音楽学校学友会誌「音楽」昭和 10 年 3 月発行）

この年、ある事情から、昇は音楽家になろうと、改めて予科（作曲希望）入学の準備をしていたのである。

●昭和 6 年度（全体）。津久井昇は最後列左から 5 番目。
前列に外国人教師。

●東京音楽学校（昭和５年）

●昭和６年度卒業写真より（部分）

２　出会い・生い立ち

●音楽学校の学友と（年代不明）。津久井昇は、前列左から２番目

昇と健蔵の二人は、昭和５年の夏頃、東京で知り合ったと思われる。

昇は、健蔵より一つ年上だった。

どちらかというと朴訥な九州人で文学に興味を持つ健蔵と都会的なセンスを持ち合わせている音楽の得意な昇とは、対照的な取り合わせであった。

どこが気に入ったのかはわからないが、いつも隣同士にいることが多かった。

強いて言えば、共通点は子どもが好きなことだった。鈴木三重吉と北原白秋が始めた「赤い鳥」の童謡に触発されたところが多かった。

が子ども向けの詩を書き、それに昇が曲を付ける、こんな夢を語ることもあった。さしずめ白秋と耕筰のコンビをめざすかのように。

ここに、残された二枚の写真がある。

撮影された時期は定かではないが、偶然にも同じ構図の写真である。

土手に腰をかけ本を読む、或いは着想のメモをとる構図である。

左は、津久井昇。右は、中西健蔵である。

津久井昇は、1911（明治 44）年 2 月 7 日、群馬県吉野郡藤岡町（現在の藤岡市）で、父、津久井安太郎、母、たきの長男として生まれた。

両親とも教師だった。幼少から音楽に触れる機会が多く、幼いときからオルガンを弾くこともあった。音楽教師になることが夢だった。

3　作曲

「南風薫る三瀦（みずま）野の黎明の声湧くところ」で始まる健蔵の手になる校歌の詩が昇のところに届いたのは、昭和 8 年の秋、上野の杜が紅葉に染まるころだった。

九州に行ったことのない昇だったが、健蔵の詩の中にその音楽的な根拠を求めようとした。

白秋の詩歌にある南国的な明るさも加味したかった。

また、有明海を干拓したたくましい末裔達の力強さも捨てがたかった。

そして何よりも子どもたちには、地域に誇りを持ち、いつでも口ずさめる親しみのわく明るく伸びやかな曲にしたかった。

健蔵がちりばめた九州有明の海一帯の山河や風物を讃える言葉の中に「さわやか」「朗らか」「閃（ひら）めく」などの形容動詞が気になっていた。

これこそが、健蔵が描く教育の理想とする子どもの姿のような気がしてきた。

各小節に付点四分音符でリズムを活性化する試みをしているのもこうした願いを込めたものと思われる。

伴奏譜を見ると、旋律が下降する時には、属七の和音を使うことにより、主和音へ心地よく導こうとの技巧も見て取れる。

濱武尋常小学校の校歌は、健蔵 22 歳、昇 23 歳という若い二人の産物だった。しかし、この後二人の運命は、戦争に翻弄されることになる。

4　作曲部入学・卒業

校歌作曲後の昇の後半生を見ていこう。

昭和 9 年 4 月、予科（作曲志望）に入学。

昭和 10 年 4 月に本科作曲部に進学、昭和 13 年に卒業した。

卒業写真を見ると、前出の教師達と共に、同期に柴田陸睦や石桁真礼生など、その後楽壇をリードし、次代を担う人材を育てた人物の姿を見ることができる。

昭和 13 年、音楽学校の卒業を機会に、予て約束を交わしていた声楽科出身の稲見静子と結婚した。

●昭和 13 年度東京音楽学校卒業写真。津久井昇は、最後列右から 5 番目。

5　静子との歩み

静子は、昭和 4 年に音楽学校予科に入学した。

静子は、昭和 11 年に本邦初演されたオペラ「神々の黄昏」（ワグナー作曲）に出演するほどの逸材だった。

この演奏会は好評で、同年 12 月にはラジオ「放送オペラ」で NHK スタジオから放送された。

第四臨時教員養成所時代に静子の伴奏を昇がしたことをきっかけに、お互いを意識する仲になっていた。

しかし、静子の親族から昇の音楽学校本科卒業が条件にされたこともあり、出会って八年目の夢を成就したことになる。

昭和 13 年の卒業演奏会となる第百六回学友会演奏会で昇は、混声合唱曲「櫻田へ」（高市黒人詩）を、第百七回演奏会には、混声合唱曲「ぬばたまの」（山部赤人）をそれぞれ発表している。

古典を題材にした作曲は、信時潔に師事したことによるものだろうか。

ただし、現在のところ、楽譜の所在は分からない。

昭和 15 年の研究科修了演奏会には、津久井昇作品「ピアノの為のフーガ」が演奏された（演奏者・川口軽六＝十三年卒業同期）記録に残っている。

この楽譜は東京芸術大学にも残っていない。

6　いづみ会

昇と静子は、市川市（千葉県）で児童・生徒への音楽教育と普及を目的とする「いづみ会」を主宰した。

当時小学生だった日向野敦子は、いづみ会での活動の様子や出張レッスンに通ってくる昇の様子を覚えている。

「先生は、子どもたちに操り人形劇を通して、音楽の楽しみを広げたいと思っていらしたようです。」と懐かしそうに話す。

ピアノのレッスンでは、「いつも、『ていねいに』『よく見ていますか』などと優しく声をかけてもらった」ことを覚えている。昇はく、「ぼくは、夏になると下痢が起こるのです。」と話していたという。

出張レッスンの後、日向野家の人々と一緒に食事をしたり、少し横になって休養したりすることもあったという。

大正期の童謡詩人たちは、純真無垢な子どもの心を「童心（わらべごころ）」と呼んだ。

「小さい頃に歌ったり聞いたりした歌は、いつまでたっても心の中に生き続けます。記憶としてだけではなく、その人の生き方や感情にまで残っていくのではないかと私は思います。だから、私は童心を大事にしたい。童心に受け止められるような音楽のすばらしさを教えたいのです。昇先生は、童心を子どもの歌に托して作曲することを喜びとされていましたよ。」昇の弟子の一人である日向野敦子は、昇の教えを受け継いで、こんな話をしてくれた。 昇は、子どもから離れることなく、教育音楽家としての道を歩もうとしていた。

戦争が始まると、徐々に紙も少なくなり、楽譜も手に入りにくくなった。楽譜を写すことも珍しくなくなった。また、曲名を日本名に変えることを余儀なくされた。

外国の曲のうちドイツの曲はいいが、それ以外の国の曲を演奏することは「非国民」と言われるなど、音楽は厳冬期を迎えた。

田舎に疎開する人も増え、津久井夫妻もいづみ会の活動を休止することにした。

そして、昭和 20 年 3 月 10 日の東京大空襲により、二人は市川を離れ、静子の実家があった土浦に疎開した。

戦争中の食糧が少ない中では、体力の消耗を防ぎ滋養をつけることが難しく、衛生状態も十分ではなかった。今ほど食糧や薬が豊富にあるわけではなかった。戦後も伝染病の広がりが心配されていた。

少し遡るが、昭和 17 年に長男・宏が誕生する。

この宏の名が著作権台帳に権利継承者としてあったお陰で、この物語は生まれた。

「身体が弱かったことと、鍵盤を弾く職業から来る手のふるえの事情から、私は父が物書きをする場面を見た記憶がありませんでした。」幼い時に父を失って、父と共に過ごす時間が必ずしも多くなかったために、父への想いが人一倍深い宏は語る。

1947（昭和 22）年 9 月 12 日、津久井昇は、腸チフスの感染がもとで疎開先の土浦市で亡くなった。（享年 36）

戦争が終わって、音楽を思うだけ楽しめる平和な時代が到来したのに。

●いづみ会演奏会後の記念写真。昇は後列左端。静子は前列右端

7　告別演奏会

同年 10 月 19 日、いづみ会の主催による『津久井昇告別演奏会』が当時の市川市立高等女学校講堂で開かれた。（写真参照）

戦後、音楽の楽しさを求めて活動再開したいづみ会だったが、牽引者である津久井昇を失った痛手からの再出発をめざしていた。

約 40 名の教え子達の演奏に加えて、音楽学校の同期生たちも駆けつけた。 礒谷威（バリトン独唱）、外狩伸一（ピアノ独奏）、 柴田睦陸（テノール独唱）、岩崎吉三（バイオリン独奏）の各氏である。＜写真最上段＞

もちろん、静子もソプラノ独唱をしている。

ここでは、津久井昇の作品も演奏されている。

昇の作品リストが現存していない状況では、告別演奏会プログラムは貴重な記録の一つである。

教え子の独唱では、「母さんの御名前」・「葡萄のつる」（白秋）「笛」・「陽炎」・「JOAK」（白秋）・「狐の舌」・「月光曲」（白秋）・「日向ぼっこ」の曲に津久井昇作曲の記述がある。

静子の演奏曲目にも白秋作詞の「お月夜」が津久井昇の作品であることを示している。

筆者の推定によれば、これらのうち、白秋の詩に昇が曲をつけたとおぼしき作品がかなりある。

同名詩に曲をつけた他の作曲者の作品もあるが、子どもが歌えるように昇がオリジナルで作曲したものと思われる。

静子の独唱には、白秋の「かやの木山」も含まれていた。

このことは、いづみ会の指導の中に白秋の童謡が多く含まれていたことを物語っている。

白秋を慕った中西健蔵物語を著した者としては「白秋をめぐる」奇縁とも言える。

いや、白秋が健蔵と昇を近づけたとも言えよう。　昇は、白秋の詩の中に童謡のめざす境地を見た。

子どもが歌いやすく、楽しく心を穏やかにする曲の創造をめざしたにちがいない。

静子は、その後、武蔵野音楽大学声楽科に勤め、教授として多くの音楽生を世に出した。

そして、昭和 51 年 3 月、思いがけない交通事故のため帰らぬ人となった。（享年 65）

8　ある電話

平成 19 年 8 月、埼玉県に移り住んでいた長男の山賀宏は、60 年ぶりに父と出会うことになる。

宏が小学校に上がる前に故人となった父、津久井昇についての問い合わせの電話だった。

電話の先方は、遠く九州の福岡県柳川市の小学校からだった。

しかも、父の作曲した校歌が 70 年以上にわたって歌い継がれていることを知り、懐かしさがこみあげてきた。父親も母親も東京音楽学校の出身であることは聞いたことがあったが、校歌作曲のことは知らなかった。会話をした記憶のない亡き父親からの時空を超えたメッセージを受け取ったような気がした。

折しもこの年の 2 月、K レコードから CD「母のぬくもり～母の背中で聞いた子守歌・昔話」が販売された。

その中に津久井昇の作品「こぶとり」が収録されている。録音は昭和 29 年 7 月 14 日とある。昇の死後、宏が物心ついて初めて耳にでき、何度も聴くことのできる作品が世に出たときであった。

「こぶとり」は、内山憲尚（幼児教育研究家）作詞で、「こぶとりじいさん」の昔話を素材にしている。話のストーリーに沿って歌が進行する。一番・三番を歌手の石井亀次郎が、二番・四番を数名の童謡歌手の子どもたちが歌っている。

人形劇のシナリオが浮かんでくるような曲である。昇は、きっといづみ会で使うことを念頭において作曲したはずである。

エピローグ

柳川市立昭代第二小学校では、朝の放送の時間に童謡タイムとして白秋の童謡をかけてきた。

津久井昇の作品も仲間入りしたことは言うまでもない。

また、作曲家、作詞家や演奏者などの紹介文が子どもたちの手で作られ、朝の童謡として曲と共に放送されることになった。

校歌が制定されて 74 年ぶりに、再び津久井昇と中西健蔵とが写真の上ではあるが、隣同士に並んだ。

濱武尋常小学校から昭代第二小学校へと時代と共に学校の名称はめまぐるしく替わったが、津久井昇と中西健蔵とは若いままの温かなまなざしで、学校の廊下を元気に行き来する子どもたちを見守っている。

【敬称略】

中西健蔵と津久井昇の邂逅は、現時点（平成 20 年 1 月）では、資料の発掘が届かず、推測の域を出ない。

東京芸術大学附属図書館貴重資料データベースから(1)昭和 6 年 3 月卒業記念写真（全体と部分)、(2)昭和 5 年東京音楽学校前景を借用しました。それ以外は、山賀宏氏・日向野敦子氏・待鳥桂司氏、中西功之氏の所蔵写真を使わせていただきました。

【文責 姉川圭介】

【参考文献】

1. 山本尚志著「日本を愛したユダヤ人ピアニストレオ・シロタ」毎日新聞社（2004 年）
2. 上笙一郎編「日本童謡事典」東京堂出版（2005 年）
3. 藤田圭雄著「童謡の散歩道」日本国際童謡館（1994 年）

【取材協力者】（順不同）

- 日向野敦子様（旧いづみ会員・ピアノ教師）
- 醍醐伸明様（DOYOーNET 主宰）
- 迫田時雄様（日本障害者ピアノ指導者研究会会長）
- 大高信様（武蔵野音楽大学同窓会事務局）
- 東京芸術大学附属図書館様
- 木下正徳様